HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市学に対する社会学の貢献
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	昭和 33年 11月 22日。
Issue Date	1958-11-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77332
Type	manuscript
File Information	D008_0133.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

狛江記録 1

NOTE BOOK

MADE BY SUPERFINE PAPER

都市學に対する

社会学よりの貢献

33.11.22

II

メハナイト

goshe

KA
20

都市学に対する社会学よりの貢献

一、都市学と村落研究学

二、社会学の中心課題

イ人間社会生活の基本的構造

ロ.四種の基本社会

a.同居團体.

b.村落

c都市

d国民社会

三、有りの儘の観察

イありの儘と云ふ意味

ロ、実證的の意味、実験の意味

ハ、直接の研究対象

a. 現在

b. 自分の所属の社会

c. 反覆的総合観察（が社会科学に於ける実験）

四、都市社会学理論に於ける私の所論

五、第四の中心問題

六、第一 聚落社会の概念

七、第二 都市の機能

八、第三、都市の社会構造
九、第四、都市の生活構造
一〇、私の所論に対する批判並に
批判答へる

一、都市之社会と村落社会

都市学会も村落研究会も共に我が

直接関係をもってゐる学会である。それが

明らかに学会であるところに問題がある。

都市学会も村落研究会もそれが、

もし行政者や社会指導者指導者の組

織する会合であるなら、何の危険もない

協力的な有益な会合となるであらう。都市とか

村落とかを色々の角度から研究して、其の成

果を都市の発展や村落の平和や発展に

役立たせんと試みる事は大いに意義ある

事である。そこでは平和や発展といふ点から

如何なる意見も価値評価をうけ

其の評価に聴従する

それは私には随分苦しい試錬であった。

＃私は農政学に専念して居た［illegible］から、社会学者の立場からの意見を求められる席上に屡々出席したが、（意識し）社会学者のみが其の真に着目し得る（者が）（発言が中傷と宣伝的なものの［illegible］）様な論者は何であるか。

（◎私は社会学の貧困さを切実に感ぜざるを得なかった。）◎当時日本の社会学者の中にこんな苦しみを感じて居た人の（はなかったかも知れぬが、ある時代の思想の）は余一人であったかも知れぬ。同じく甚だしい立場からの発言を求めて居たのは社会学から強い［illegible］其時の日本の思想には今日とは比較にならぬ程深刻な問題が其解決を求めて居た。（要するに社会学者を）

~~かくてある~~

私はもとより経済学者として私の研究が（その他の）政策や理想や実際家の要求によって少しでも曲げられたりすることを恐れはしなかったが、私の学問が少しでも苦しむ人の助けになる事が出来るかも知れぬと（るなら役立てたいと云ふ気持は切実だった。）（いは切実だった、て居た。）

強かっている。経済学者の研究し社会学［illegible］出題する学者の（継承）研究し了史研究の研究しさへ行政官や社会指導者（は）皆研考にするが（全く）か出来る。取捨選択は後者の評価に任されるのである。＃（凡そ正常な意味での）統合

けれども、社会学はそんな単純な解（あるすぎでは）［illegible］学の（研究の結果が与へられるかも知れぬ。）

研究は各立場の判断によって異にし（と方法）（何れか優劣の別がある筈はなく）居るのであるから、互に他を尊重し（に協力して居た私には）考するよりはありなとして非難批判するかぬきくは許されすかいさる事である。

正しい概念の確立と法則性の発見以外に（に浸見するや）（無価値）

ま　、又はよい

~~如何なる人の生産物を持かすか如何にし~~、彼ま

中心的であった。都市は可能なる者低の生活を構にあった

~~農民を搾取し農業生産者を持かすとか~~

~~[illegible]~~　否都市以外

⓪当時は農村の貧しい問題をもって居た人には行政官、社会指導者達はもとより、政治家、農学校教師などが主であった。※彼等は皆貧しく農民村を農民の生活の場所、農民は農産物製造者として見る見方は一様であった。それに対して農民は~~農産物生産者~~であるが一人の人間であると見るのみ、農村は~~農産物を生産する~~自然農業を成し人格をもって居る人々が造って居る生活共同の場所であると主張した。私の立論はいつもこの様に国家より社会が社会生存よりの発展を主張した。私は~~それ~~が社会学者として私が当時の農村問題に対して~~登~~定ましたる者とすべてであった。Δ

信じて居た。

#彼等は強く又は皆都市に住んで居る人々であったので、彼等の考へ方は都市中心的な考へ方であった。農村は農産物を生産して居るところと、農民は農産物を生産する生産力と考へられて居た。彼等んは農村の発展とみるのは農学生産力の発展をみるに外ならなかった。

偉位

の~~せ~~ば学問の操作には過程がかかりすぎてはならない。

~~よ有、有概か望ましい~~

Δこんな主張なしそれは社会学者の見方と反論する人もあるかと思ふ。然し私は都市に対しても同じ様な考へを持って居た⓪~~しかし[illegible]~~の一番ためになるは~~発表あるかも~~　こんな発言を経済的な根拠の上に主張しなけるものは社会学以外にはないからである。

⓪こんな考へは社会学者の見方かも知れぬが、社会学の立場で第一に先ず考へを発表して必要がある。

念を押しておく

六、社会学の中心課題

私は都市社会学は社会学の立場から貢献しやうとして居る。社会学の立場と云ふ事を私は次の様に解して居る。人間社会の基本的構造の究明と云ふ事が社会学に課せられて居る原理の課題であると思って居る。人間社会の基本的構造の究明には勿論様々の方面の研究が直接間接に参加し得るものであるが、人間社会の基本的構造が(一)同居関係（主として家族）(二)村落(三)都市(四)国民社会の四つの強力な相の次に

主として営まれてゐるのは明らかの体系である、
から、この四つの框即ち構造や機能△の究明
と云ふ事~~関する研究~~は何れの社会学的研究にも
見失はれてはならぬものの様に思ふ。
この四つの框について充分の見通しがなくし
てどうして[illegible]社会生活の正しい理解が
ありえようか
社会生活に関しては色々の方面からの
研究があるが、これ等の框についての
研究に出発し得る学問は社会学
以外には存しない。他の学問もこの框
に対する研究は二次的に社会学に期
寧ろ[illegible]は

＃
待し社会学の学派学説が濫しランするよ。は此處である。

待して居る最大最高のものである。社会学の志す何ものとしては事を社会学自体は忘れがちである。
これ等の相ハ対する研究は忽ち依ル[illegible]
では如何のみならず、それを殊に究極の目標とするものである。
社会学は部分的に社会生活の様々の面を研究もして居るが、それ等が社会学的な研究でないとは云ふのではなく、それ等の研究もとして價値少なへ直接的には同様的には人間社会生活の基本的な構造の究明を窮極に目ざして居るものと云ふ事が出来よう。
中心的課題が明確でなければ、社会学は百家百説を主張し百鬼夜＃

すな方法がなかったら実践して見て

私が基礎理論の思弁的研究者達の研究に足印をつけれのは、それ等の理論が実践と併行して見て（確かに実践をか）されねばならぬ。実践して見て（確かに実験の結果）実験の結果があったからである。

私はまだ盲従して納得のゆく理論でなければ、たとえ先生（偉いと云われる）（例外のない偉い先生）の研究も同じにしない。（優れた学者にしても。）

先人の與へた二つの極に関する歴史の常識的な理解をも基礎として、その上に立てられた（学者の）基礎理論が空理空論に終るのは当然である。

学者の研究は研究の第一歩から踏み出す事の中の大なるものは分りつつあると云はねばならぬ。従来の研究の多くが実際の基礎の上に立って居ないからである。

＃を出来る丈直接に出来る丈破に

三、有りの儘の観察（の構造）

右の如き基本的社会の理解のためには（するには）社会生活の有りの儘＃がわかれる観察が必要である。有りの儘の観察とは（諸々の観念を捨て去る）一組の因果関係についての（特定の観点価値）は、先入観念を捨てて物事を観察することである。その為にここでは特に強調される必要がある。もっと具体的に云へば、社会科学等の何れの見地よりし（の一つよりの）（法）又自由主義や民主主義や解放思想に（何れの思想的偏見も捨てねば）（保守主義にも偏しない）（近代の）も捉はれぬ観察を意味する。（人間関係）

を経済学者は重きを法変え [illegible] の道徳に於いて技術しおきたり機能 義務の関係に於いて論理的な自由 [illegible]

かの事。故に [illegible]

⑪

~~從来諸君は~~又此組織を絶対的（国家的存在）

ものと認めて放棄する~~者も亦ありは~~しないか

然らば~~それ本当~~か

なし何れも社会生活をあく

のあるに放棄して行くものでは

ないか

~~も~~責任の関係に於いて又 或いは ~~未来の進歩の為~~

就業は階級的支配と被支配の関係

（中には存在）に於いて~~のみ~~政治家しようと~~して~~ ⑫ に会社の

はそれぞれの利れの価値にも関着する（本職）（価値）

事実、ありのままの人の中には人と人との

関係が何であるか 如何なる力に動かされ

生きて行くかを理解し（差くその範囲におさめそれを類型に整理）

型を整理して何が基礎的な関係である

かを見定めて行く 其れは政治の関係であるか

如しその関係を明にせねば（織りなして）

都市を構成し居る人間関係は何

であるか何が最も基本的な支柱の関

⑥ 都市とは何ぞやとか村落とは何ぞやに答へる為には都市とか村落に（同様な）なす基本は社会構造理解の上に立つものでなければならない。が、その為には都市生活に於ける諸々関係のあらゆる型の究明が先づ全的把握が必要である。

井 只存在のみが我々の研究を可能ならしむる唯一の時空的な断面である。ここに私等が存在と云ふは相当に厚みをもつたものであるが、要件諸々な関係の型が同様の形態を保つて存する間は（厳密な存在と）常に存在と認めらるゝのである。

a

係であるか。之れを知る為には都市生活に存するあらゆる関係の型を整理することによつてのみ始めて可能である。

⑥ ~~凡そ都市生活に於ける基本的な社会構造は何んであるかを知るには~~ 又その為には都市生活のあらゆる側面を何等（偏倚）あらゆる場合を観察し注意して もくり返して（観察し）~~未多くの観察者の看過~~ 事実を重ねてはじめて可能である。かくの如き観察が大体可能であるのは時間的には現存以外には到底求められない。井 史実に残つて居る過去の人の足跡は過去の何れの時代に於ても社会学者は其の時の社会（については云はれる）

※元々学者は実証的であるため（史研究が）には史料的に把握の調査研究の上に認識の起点を据えることに重点をおくべきものである。然し歴史的研究が社会学では左程重視されない（決して）研究であるとまでのべないが（一つの学問として認められる）社会学の基本的な科学構造を明らかにする（ここには総合的把握を）以上（かくのみきたる）必要なのだが、総合の為に現在に（とまでではない）社会学の研究資料をいかに的確な（社会学的研究の）歴史的研究は社会学の方法としての一部分（高い価値をもっている）の研究の作業である。社会学の研究総合的把握に関するもの丈でなく（的に）風に関係する。

を総合的に把握せしめんとする史料の存在する（一組を揃えても全く無い）（今日の社会の）九牛の一毛だに残していない。（繰りかえしていう史実は社会学が）そこで把時についていうも、後世の史実より見れば調査のため史家の文書等は社会の為の資料として、後世に残るであろう。数字や記録も社会学の為の資料となるものではなく、把時の研究は社会学の一つの材料となる。必ず強いて多くの社会は個々の…社会は改めて自ら調査しなければならぬ。全く自ら調査するらしく偶々残っている過去の記録の一つの材料として社会学の総合的研究に当てはめ、結び付けるに過ぎない。（竹箱から試み結論）立てるならば、将来の一つの手段である。然し未だ其の中にも甚だしい。

※

6

C.

次に社会関係は意味の世界に於ける出来事であるが、意味共通の世界は所属する社会毎に特に国民社会を異にする毎に著しく異って居るから、研究者は自分の所属する足下の社会に研究の足場をおくことが簡潔である。正しい意味の理解はその意味の世界への生活実践者として入ってゆかなければ可能でない場合が多い。人間社会生活の基本的構造の認識を窮極の課題として居る社会学は社会関係のあらゆる~~様~~場面をその視野の中に収むべきものであるが、その対象が元来の宗教性を帯びる為めには同一のもしくは同種の体系が何人によっても確実

七

され得るもの、又は誰も反覆し研究
し得るものでなければならぬ。自然科学
における實驗は條件を等しくして研究
を研究するものであるが、社會學などにおけ
る實驗は條件を等しくするヿは不可
能である。故、そこでは多くの人が同時に又は何度も繰り
返して研究し得るといふ事で満足しなけ
ればならぬ。故に社會學で取扱ふもの
は可能は類型に外ならぬ。具体的な社會圏は
の様々の事実の中から漸次高度の類
型~~共~~似を~~[illegible]~~抽い、如何なる類型の社會圏
的が人間社會の基本的構造を組成し
其の

て居るかを見定めんとするものである。この類型の概念はある人々の所謂形式の概念に近いところもあるけれども、類型の体系化~~中心概念~~とそのものに社会学の窮極的設定課題を見出すなどとは私は決して考へて居ない。社会学の窮極の設定課題は人間社会の基本的構造の闡明であつて、其の為に具体的なあらゆる人間関係の類型を体系化し整理して行くのである。

都市は人間社会の基本的構造中の重要なる一領域を形成

して居るのであつて、その社会組織ー
が如何に構成されて居るかの究明は
都市の凡ゆる関係より殊に[illegible]に探され
ている最窮極の課題である、又社会
学以外~~本~~の科学よりは決してはたされ
ない、研究課題であると確信する。

以上
14ps

（五）

四、拙著「都市社会学原理」における私の所論

拙著「都市社会学原理」における都市に関する私の所論の中、次の四つの点は私の立論の支柱をなす根本理論であるが、それは全く社会学的よりの研究地であると云ふ事が出来る。　私の考へが正しく理解される為に、ここにその要旨を述べる事は無駄ではあるまいと思ふ。又この拙著において論及充分ならずして居ないものもあるので ~~出し張いたい点も~~ ここで少しく補述したいと思ふところである。

（五）六

第一 聚落地理学~~学~~の概念

先づ第一に私は「聚落地理学」の概念に到達して居る。私の研究の起点は現在の日本に於ける足下の社会的事実の観察に始まつて居る。私が聚落地理の概念を措定したのも現在の日本に於ける村落と都市とそれから都市化の過程を観察する中に到達したの（ここで私が到達した）ものであるが、此考へが人文地理学研究の諸成果や地理学者の研究の成果をも参酌して居ないことを断つた。然し此考へは歴史的発展の事実をも重視するやう考へられるが、それは実証的

研究者としての私は、直接には余り問題ではない。吟味の役をなすものである。私は只村落より都市が発展したとみなす、村落と都市とは共通の基本的な機能をもつものであるとするを確認して満足した。村落に何かが加はるによって加はった丈都市的に向ふとみる傾向を見出したが、その何か中決定的には何かが「何んであった」苦心したとさへてある。北海道の都市の形成の研究をして居る内にその何かは社会的交流の場たる都市的機関だとみるように思ひあたった。私が都市的機関見知らぬ人との社会関係の場所（知ったのは余程あとになってからである）が村落的社会を都市的に同ばしむる要因だとおもふになった

結局~~的~~　一致したのだ

私の考へも此の考へに到達したに

過去を考へると此の常識的な考へるけれども

◎私は~~此~~考へを根據づける為には

の機能

生業に関する分析を初めからやら

なければならなかったのだ。

と云ふものの発生増加と共に都市性がそ

れに比例して増加すると云ふ事実をその後

私は数多くの事例によってたしかめる

事が出来た。一般に非農的生業と云はれ

るものは殆ど皆社会的交流の結節としての

す社会的機関であるを示して居る事を

非農的生業者の集って居る聚落を都

市と考へる事は一般に常識的になって居

考へてあるが、その非農的生業は皆

社会的交流の結節の役をなして居るよ

との発見は一つの飛躍した見解であった

と自分から思って居る。

社会的交流の結節と云ふ働き

#都市に人口が集中して来往する事也
都市に人が盛んに往来すると云ふ事也
故に交通の[illegible]化の激甚が加はって行くなり、都心に生業の分化が生じ、都心に高い地代が生れ高い生活水準を必要とすると云ふ事也
皆都市に経済的機関が集まると云ふ事に伴って中経集中に生ずる事である。

決められると直ちに
が都市の様々の性格も氷解するかいがある #
次に都市は右の如く村落に社会的交流の経済的機関即ち官庁とか商~~業~~店とか工場とかサービス業とかが少しづゝ加はって行くことによって、それ丈村落的より都市的には近と云ふ事は種々なる周囲に云の事係は山積して居るから、ここに疑念を抱く人はないと思はれるが、村落と都市とを共に集落として見るのは両者に共通の組織が存し、都市は村落に経済的機関ばかりが加はった丈が村落と異なる点であることを実證したからである。
村落も都市も共に持って居る組織は

一、その他の共同災害に対して共同防衛の活動が見られるのは今日の村落にも古い時代の都市にも見られた事は明らかの様である

一、共同災害に対する共同防衛為の機能と、二、積極的な又は消極的な生活協力の機能である事は私は事實によ論証する事が出来る

古い時代の村落では部落住民は共同災害には色々の天災や人災が考へられるが、今日の都市の様に交通通信の機関が発展し、国家が今日の様に領土内の治安の任にあたつて居る時代においては密居的巨大集落をなして居る今日の大都市では火災に対する防衛体制が最も緊要である。然し交通通信防疫、給水、送電、通信も密居的大集落の共同災害を不断に防衛して居る機構である。

小さな村落では一朝事ある時は村の共同意識によつて自警団が

⑩大都市の色々の施設はそれを常備的空間的綜合的に整備して居る丈のもので、それと

組織され彼等は不眠不休で其の防衛の為に活動する。~~ゆとまり~~⑩全然同一の性格である。より科学的になり、より有目的になり、より常設的になって居る大都市防衛施設は大都市のすみずみまで不断に警戒の眼を光らしてはない。大都市も一個の巨大な統一的な国土防衛力を有して居ると云ふ事は日常情報の組織を検討すればよい我々は充分認める事が出来る。都市の第二の機能は其の住民が積極的に或いは消極的に生活防衛力の体制をなして居るのである。村落では思想の感情的な団体が生活協力の秩序を組織し、其の合理

的な又より打算的な交易の制度によって協力の秩序が維持されて居る。この関係は商業に説明すれば面倒すぎる問題を含んで居るので今ここで充分に説明する事は出来ないが、勤労に依って居る者は、うまうまと投資の者も見ず知らずの赤の他人のウドン屋に飛び込んでいくらかのお銭の代償として暖かいウドンを~~水翁りすのウトン屋出てくれ~~る給与れ ほめようか出来ぬ

対して報酬の反対給付が与へられる事は出来ない

であると思ひ込んで居る我々には、ウドン屋や商業には うまうまで見ず知らずの生活の協力者だとは解し難い。けれども生活の協力は~~果~~愛に乎ちん感情的な協力丈ではなく一口各自が打算の為に

未知の人の間の日毎の

又は搾取せんとしている協力もある。近世的大聚落における協力は合理打算、利用、搾取等様々の非人間的な形をおびるに至っている。けれどもそれが、協力であることに変りはない。

いつまでも長く人を支配する様な形

の生活

恩を蒙りそれによって協力を秩序を保つ村落

よって

のボス的な感情的な協力とよい対照である。村落では人と人、家と家の間に恩誼の糸がはりまわされそれによってねばっこいさっぱりしない村落的秩序がある。それに比すれば合理的交易による子の隣彼らの都市の協力~~は~~も愛すべき存在

發明をもって居るではないし、も
村落でも都市でもその集落内では常に人は部分的には
の生活に必ず要するものは他の集落に依存し、その生活に必要なるを求める
に出かけなくても生活の資も貯へてある。その集落内で上の必要は充たされる。村落
は多分に自足自給の経済をなして来たか
ら個々の家としても村としても他の協力なしで
生活する事が出来た範囲が多かったが、協
市では人が食料を自給しなくなった時から交易これを相互に
によって生活せざるをえなくなって居るので
あるから、協同か協力を除いては一日も生
活が出来ない。今規約な協力の制度として交易の制度は出来て発達せ
ざるをえなかったのである。協力の最も合理化

化し而純化したものが、實踐である。實
踐は都市ル於ける生活協力であるといふのは
の技術
合理的な
それ程を理論論理では[illegible]
あるまい

（七）

~~中~~二　都市~~十~~の社会~~機~~の機能

都市は村落と同様に村落社会としての性格をもって居ると共にその上に社会的交流結節としての機能をもって居る。

都市をして都市たらしむるものはこの社会的交流結節としての機能である。社会的交流結節として都市が作用して居るのは社会的交流結節の役を事実上演ずる色々の生業がそこに集まって居るからである。社会的交流の役を演ずる生業~~は~~と云っても、それを目的として生業者は意識して居るのではなく、生きんが為の生業活動が結果において交流結節の

国民社会内の社会的

以上16p（+14）

役を営なんで居るまで~~結果をおかして居るもの~~である。

私は今日の文化の段階では事実上社会的交流の~~大きな~~強力な障壁をなして居るものは「国境」即ち国民社会の~~地域~~境界であると思ふ。国境の線の上で一切の社会的交流の流れは一度ストップして居る。国の中央からの一切の指令はさいはての一農家までも間違いなく届いて居るかに国境の線に達すれば直ちに停止する。~~を越しては完全に止まるのである。~~新らしい商品の流れも教育の指導方針もマス・コミの流動も生活文化も映画も政府の圧力も、保護も国境の線上で、~~中~~停止する。私共は此国民社会

の地域的限界の曖昧さは直ちに之を認めなければ

ならぬ。ヒューマニズムの夢、国際社会の私の謂い

花やかな論動に私等は幻惑されてはいけないとも

論究のあし国境の高い高い障壁を社会学者は

高く認識して居る必要がある。

都市は社会的交流の都市的機関の集まって居るとこ

ろであるから都市そのもの~~が~~をも社会的交流の

結節となって居ると述べる時、その社会的

交流は事実上国民社会内に於ける

社会的交流を意味して居る。

~~であるから~~而して国民社会は本来政治

的によって其基礎を与へられて居る社会

である。口家の主権が統治してゐる領土内の口民の社会である。そこでは何よりも統治を求めるが第一義的~~である~~に支配してゐる。口家~~の~~内の統治の都~~辛~~合上から口家の中心地に~~俗~~権力の発動するところとして次に首都が設定され~~本部周辺より~~この首都より口の領土内のどんな小さな一家庭にまでも口の統治が及び保護の恩恵を与へると共に義務~~を~~が要求~~する~~される。口家の統治は断え間なく全口民を監視する必要がある。あらゆる情報を口の隅々からたえず受け取らねばならぬ為に又あらゆる統治上の障害

に対して中央官庁の決定が出されて来ます為に国の中心から出される権力が浸透され得る為に国内の要所毎に不断に其の治の施設が必要であり、又かくの如き地方的要所の統治が管轄地域毎に又何級もの支所や出張所が設置される。統治の中心である首都其の下の府県所在地、其の中の都市町村役場所在地があるのは誰も認めるところである。これ等の各段階の統治施設を通して国家のどの一軒の家からももれなく例えば税金はすいあげられて首都の中央政府に集められる。国民のどの一人